

安部公房論

一

安部公房の文学を生物学的な側面から考察したい。これまで本格的には採り上げられなかった生物学的な視点から照射することによって、作品や作家の本質を明らかにすることがねらいである。当時の生物学的な知見をいかに吸収し、自らの作品の中でどのように表出しているのかを確認していきたい。

安部は作家としての出発の当初からヒトとは何かということに生物学的な関心を示していたが、それだけでなく、分子生物学の進展によって生命と物質が同次元で捉えられるようになったことにも強い関心を示していた。人間とは何かを考える上で、思想の根底的な変革にもつながると考えていた。安部の文学を考察する上で、こうした生物学等の学問的成果が、作品にどのように反映しているかということを検証することは重要であると思われる。

安部は、ドナルド・ブラウンとの対談「科学と芸術 結合は可能」(昭60・10)の中で、「これまでは、科学と芸術・文学は握手する

ことが非常に難しいのだという風に受けとめられていた。しかし、分子生物学の登場で、思想的展開がなされていけば、科学と芸術・文学が握手できるチャンスが出てくるんじゃないかという予感がする」と述べている^{注1}。新たな文学作品の創出に向けて、最新の科学も積極的に取り込もうとしていたことが分かる。

本稿では、安部における生物学的な要素を含む小説や分子生物学についての言説を中心に考察したい。具体的には、小説「事業」「保護色」「第四間氷期」「方舟さくら丸」、随筆「もぐら日記」、対談「物質・生命・精神 そしてX」「科学と芸術 結合は可能」等を探り上げたい。

なお、「砂の女」(昭37・6)の中にも、「欲望を満たしたものは、彼ではなくて、まるで彼の肉体を借りた別のもののように見えある。性はもともと、個々の肉体ではなく、種の管轄に属しているのかもしれない……役目を終えた個体は、さっさとまた元の席へと戻って行かなければならないのだ」とある。ここで「役目」とは種の保

和田 勉

存、つまり子孫を残すことであり、「元の席」とは、無機物、つまり非生命体と言い換えることができよう。ここには、リチャード・ドーキンスが『利己的な遺伝子』の中で述べたような、個人を主体と捉えるのではなく、遺伝子を主体と捉える視点と通うところがある。もともとドーキンスは遺伝子を中心に据えたが、『砂の女』の主人公仁木順平は種を中心に据えている。仁木は、「さいわい、アメーバからつづく、何十億年もの歴史をひかえた性欲は、そうめつたにすり切れたりはいしないだろう」と性にまつわる長い歴史についても思う。

二

それでは、生物学的な内容が盛り込まれた小説について分析したい。

「事業」（昭25・10）では、食品加工に携わる「私」の想念が手紙文の形で展開されている。「生物化学的にみても、鼠の蛋白質は牛よりも豚よりも、ましてや、いかなる魚類などよりも人間に適した食物なのである」という考えから、鼠肉ソーセージを生産しているのだが、「より豊富で採取に便利な、しかも一段と口当りのいい人肉」も蛋白源とするようになる。更に原料不足から殺人による共食についてまで考える。鼠のみならず、ヒトもソーセージの材料とすることについて、主人公は「共食いの美德」として、自己の行為を正

当化する。

「かまきりの共食いは性交を単なる生の浪費から唯一なる死の莊嚴にまでも上げたものであるし、おおかみやねずみの共食いは仲間の苦しみをそれ以上ながびかせまいとする愛情に満ちた配慮と、地球の表面を腐屍でよごすまいとする清潔感と、それに適当に口数を調節しようとする合理精神に由来する」（傍点原文）と考える。「事業」では、鼠肉も人肉も蛋白質としては同じであるということ、グロテスクなイメージが展開されている。手紙が「彼の中の彼」宛であることから、結局この手紙は出されずじまいということであるが、ヒトの身体を蛋白源として即物的に捉えているところにこの作品の特質がある。

「保護色」（昭26・5）では、皮膚の色が、保護色のような反応を示す女性が描かれる。「保護色への傾向は、人類全体の傾向である」という学説を信じる「私」はこの女性に、「カメレオンは皮下に多くの色素粒をもった色素細胞があり、視神経を通して外界の色がこの細胞に伝えられると、一定の色素粒だけが選択的に拡散または集合し、体色変化がおきるのです。カメレオンを盲目にすればこの変化はおきません。同じようなことが、モエビ、アマガエル、カレイ、ヒラメ等でも証明されています」というように説明する。

保護色について、「私」はこの分野を研究している「先生」に尋ねる。すると、地面に図式を書いた後、「これはドーパー反応、つ

まり色素形成細胞中の酵素によって、ドーパーが酸化、メラニンを形成する過程を示す式だが、これがチロジンを間においてアドレナリンと密接なつながりを持つ」と説明する。保護色を化学反応として、理論的に解説するのである。「私」は「先生」に「人間に進化論を適用することについての疑問なんです、たしかに保護色は自然律における最適者かもしれませんが、だが、社会律、こんな言葉があるかどうか知りませんが、においても、それが最適者と言えるでしょうか。この考えは、ぼくには、スペンサーやヘッケルの貴族主義の裏がえしのように思われてならないのです」という疑問を伝える。社会もひとつの有機体であるとみなして生物と同じく自然選択で進化するという社会進化論を唱えたスペンサーや、個体発生は系統発生を繰り返すというヘッケルの説などを視野に入れながら、人間における進化が、道具の進化に取って代ったと述べる。それを聞いた「先生」は、人間は道具から更に階級の闘争に進化したと答える。

「保護色」では、表題のような生物学的な内容を踏まえながら、人間社会が階級制や制服など保護的な要素を持っていることを風刺的に描いている。

『第四間水期』（昭34・7）では、勝見博士が予言機械によって一人の男の未来を予測しようとして、殺人事件に巻き込まれる。死体となった男は、予言機械に記憶された人格方程式として、胎児を買

い取る病院について語り出す。勝見の妻まで胎児を買い取られ、次に勝見は水棲哺乳動物の研究がされている世界に紛れ込んで行く。胎児を売買する目的は「生物の計画的改造」、つまりは水中人間の飼育のために必要だったのである。一方、予言機械の中には勝見の未来を見てしまったもう一人の勝見が現われ、勝見とやりとりする。現実世界を温存しようとする勝見は、ついに水棲人注に抹殺されることになる。結末では、予言機械が、水棲人が自分たちの政府を持つたことについて語り出す。この作品は、科学技術の発展によって未来を目指す人類の姿が風刺的に捉えられているという視点から論じられることが多いが、本稿では、生物学的な視点から考察したい。

「哺乳動物の母胎外発生の研究は、世界中でさかん」だということとで、ストーリーが展開する。「生物学の講義みたいで恐縮ですが、ここが一番大切なところ」という水棲動物研究所の山本の話も示される。つまり、「進化学説には『相関の法則』、つまり生物体の一つの器官の変化は、必然的に、他の器官の変化をひきおこすという、重要な法則がある。個体発生の過程で、系統発生が繰返されるのも、単に過去が繰返されるというだけのことではなく、それが発生を先におしすすめるために必要なことだからだ。当然すべてが繰返されるわけではない。たとえば血液などは、その最初からほとんど成体と同じである。その消滅が、次の生成に必要であるようなものだけが、繰返されているわけだ。たとえば豚にも、前腎の時期がある。

これは成体では、ヤツメウナギだけしかもっていないものだ。五日間くらいで、なんの作用もせずに退化してしまう。そしてその後の中腎が形成される。一見、無駄な手続きのようにもみえるが、しかしこの時期に前腎を除去してしまうと、中腎は形成されない。つまり前腎の退化は、ただの退化ではなく、中腎期に進むための、一種の内分泌器官の役割をはたしているわけなのだ。その中腎も、いずれ最後段階である本当の腎臓を形成するための内分泌器官に、分化変形してしまう」というのである。このような生物学的な言説は、事件を推理する形で展開するこの小説に、リアリティを持たせる装置として機能している。『第四間水期』では、このような生物学的な内容が、作品の根幹にあることは間違いない。ただし、それが露わにならないように、不可解な謎を解くような形で展開したり、登場人物の会話などを前面に出したりしてオーバーラップし、小説らしさを出すための企みが巧妙になされている。このような科学的言説が文学の中に積極的に取り込まれることによって、文学作品そのものの異化がなされている。そこには、情緒的な小説への拒絶も明確に読みとれる。

水棲動物研究所では、「進化を人為的、かつ飛躍的に、しかも定向的に行わせようという大それた計画」が企まれている。この研究所の山本は、「個体発生は系統発生を繰返すものです。(中略) 発生の段階において、なんらかの手を加えてやれば、その生物を系統発

生から引離し、まったく新しい種にしてやることもできるわけだ」と言う。発生段階において人工的に操作すれば、遺伝子のプログラムが変化し、別の種になるかもしれないのであり、このことが作品を展開する上で重要な要素となっている。更に、「私たちは昆虫の変態に目をつけた。……昆虫の変態を支配しているのが、アラタ体から出る『幼虫ホルモン』と、神経分泌細胞から出る『分化ホルモン』であることは、昔から知られていましたし、ある時期におけるその何れかの除去が、どういう結果を生むかという実験も行われていた。ただそれを定量的に、微細に調節して、生長の手綱を調節するのが技術的に困難だったのです。ところが今から、ちょうど九年前、アメリカとソ連でほとんど同時に実験に成功した。つづいてその翌年、私たちのグループでも、独自にその技術をつかんだのです」と山本は述べる。ここには、内分泌器官「アラタ体」のように生物学の用語が多く用いられている。また、山本は「神経組織というやつは、実に不思議なものです。単に生体の維持に不可欠なばかりでなく、進化のエネルギーでもあるわけだ。このホルモンをとめてしまうと、その段階で、たちまち分化は停止してしまします」と述べ、これを応用すれば、新たな種を作り出すことも可能だと言うのである。ここでも、科学的な真実を踏まえているような形でフィクションを展開しており、そのことでリアリティを獲得している。このような系統発生の過程で操作し新種を作り出すというこ

とは、現実の世界ではタブーとされているが、安部は未来における生命操作のありようを、想像力を駆使して「胎児の変形加工処理場」という形で斬新に展開している。

「もつとも進化した陸棲動物である人間でさえ、血液から、骨から、原形質にいたるまで、ほとんどが海の成分でなりたっている。最初の生命が、海の結晶であつたばかりでなく、その後も生命は、ずっと海に依存しつづけてきたのです。陸に上るときでさえ、海をそのまま、皮膚にくるんで搬んできてしまった」と、水棲人によって海の意義が強調される。ここでは、進化の過程まで視野に入れることで、過去から連続と続く時間と空間について思いを馳せ、未来についての予見の物語に説得力を持たせようとしている。

「自分の子供を殺して、未来とのつながりを絶ち、裏返しの世界に逃げこむことばかりを考えている」と、予言機械の中のもう一人の勝見は、保守的な勝見を非難する。もう一人の勝見を含む水棲人は、温暖化に伴う「洪水の不安」が生み出したものという設定になっているし、また海中回帰という言葉が先祖返りをする^{注3}ことで、新たな生き方を求めたということでもある。勝見は予言機械によって水棲人の世界と接することで、日常そのものの脆弱さや虚妄性に気づかされる。予言機械によって人間の未来を「秩序や法則^{注4}」として論理的に構築しようとしても、うまく行くはずがなく、「混沌」とした未来を凝視せざるを得ない。漠然とした未来について、若干の予

知能力があるゆえに機械を開発し、予見しようとする現代人の実存的な不安がテーマであるとも読める。

『第四間水期』は、独創的であり想像力の豊かさは十分に窺える。だが、荒唐無稽な未来の話にどれほど説得力があるかが、この作品を評価する上で鍵となる^{注5}だろう。生物学的な言説によってリアリティを持たせようとしたことを考慮に入れても、現実離れしすぎていて奇抜すぎるという側面は否定できまい。小説において未来の時間を取り入れることの難しさも考慮しなければなるまいが、特にこの作品において、安部が時間や空間をどのように構成し、処理しているかということが重要である。未来を描いた『第四間水期』において安部が苦心した問題は、何を書くかということよりも、いかに書くかということであつただろう。それを念頭に置いた上で、クロールン羊やデザイナーチャイルドといったことが実際に起こっている現在の視点から見ても、小説としての迫真性に問題がないとは言えない。特に水棲人の造形そのもの、及び水棲人に滅ぼされる勝美に、どれほどのリアリティや必然性があるかという点で問題が残る。「未来の残酷さとの対決」(「あとがき」)を余儀なくされて滅びていった勝見の人物造形に、どれ程の説得力があるかということである。だが、それは安部の未来を予見する能力や作家としての実験的な試みを十分に認めた上で、『砂の女』等の名作と対比した上でのことである。

次に『方舟さくら丸』（昭59・11）についても、生物学的な視点から見ていきたい。『方舟さくら丸』では、モグラは方舟の船長たるべく、昆虫屋とサクラと女と共に地下の採石場跡で共同生活をすることになる。三人とはユープレツチャが取り持つ縁で知り合ったのであり、それはこの四人の閉鎖的な生活にいつまでも尾を引くイメージとして仕掛けられている。お互いの弱点（＝尻尾）を話すことで連帯を強めようとするが、それはあたかも「猿」の「マウンティング」にも相当する行為である。同じ採石場跡に住みつく老人グループ「ほうき隊」と敵対するが、その隊長がモグラの最も嫌う猪突だった。モグラは足を便器の穴にはまり込ませ脱け出せなくなり、ユープレツチャ的な存在に陥る。更に猪突の死や女子中学生狩りなどの事件を通して、モグラの無力さが明らかとなり、まさに名は体を表すということになる。

ところで、モグラは、「人類と祖先をともにする類人猿には、はつきり二つの傾向が認められる。集団をつくって社会化しようとする拡張傾向と、縄張りにこもって城を築こうとする定着傾向だ。人間はなぜかこの二つの矛盾する傾向を同時に身につけてしまった。ネズミやゴキブリ以上の適応力で地上にはびこる力を手にすることが出来た半面、たがいに殺しあう憎悪の才能も手にしてしまったのだ。すでに自然と対等になってしまった人間に、この両刃の剣は重すぎると。巨大な電動鋸で白魚の腹を割くような政治に血道をあげること

になる。もしほくらがユープレツチャのように……」と思う。この後には、縄張りを最小にすれば、ヒトも国家を形成したりして醜い争いをすることもなかったと続くだろう。確かにヒトは、国家というような広大な共同体への執着と自己中心的な閉鎖的な縄張りへの執着という、およそ相反する志向があり、モグラの中に両方の特質が集約して表されている。

「人間は本来忘却動物だつていうね。おかげで頭を使うようになって、猿から人間に進化したんだとさ」とあり、進化の過程を視野に入れながら、ヒトの生態が相対化して捉えられている。また、「結婚だつて血は遠いほどうい。偶然の選択はたぶん遺伝学的法則に叶ったやりかたなのだ」ともあり、結婚についても、遺伝ということがまず連想されている。両親についての説明も、「ぼくの生物学上の父親は通称〔猪突〕と呼ばれ、地元の鼻つまみ者だった」とか「ぼくの生物学上の母がやっていたタバコ屋」というように、あえて「生物学上の」と断り書きを付けて、遺伝的なつながりのみに限定しようとしている。特に父親の持つ粗暴な性格を嫌い、忌むべき血縁とのつながりを絶ちたいという願望を持っており、それはモグラの現実世界からの逃避にもつながっている。核状況下から逃れたという観念的なテーマに、モグラの父親とのことは実感的なリアリティを与える役割を果たしている。

核状況下を生きのびるということに関して、モグラは「ユープレツ

チャだつて交尾のためには羽化してしまうのだ。羽化は再生と同時に死の準備でもある。女のスカートのふくらみを横目で見ながら、ほくも羽化しかかっているのかもしれないと思う。生きのびるために性を自覚し、それはつまりは「再生と同時に死の準備でもある」と捉え、種の保存と伝達ということでは昆虫とたいした違いはないと考へてしまうのである。そもそも、モグラ自身、「次第に便器中心の生活設計が枝をひろげていったわけだ。期せずしてユーブケツチャになりかけていた」のである。

サクラは、「おれ、組に入っていたころ、偶然ダーウィンの進化論つての読んだことがあるんだ。漫画にしたやつだけだね。でもあれで人生観が変ったな。命を張って生きるなんて、ご大層なことは言いつこなし、ヤクザの喧嘩が本物の喧嘩なら、適者生存で人間ぜんぶヤクザになっちゃうじゃないか。ヤクザにはヤクザの世界しか見えないんだ。縄張り争いだけの人生さ。(中略) 生きている者はぜんぶ適者」と話す。サクラが読んだ「ダーウィンの進化論」には「適者生存」、つまり最も環境に適応した遺伝子が選択されて生き残り、その遺伝子が徐々に優勢になっていくという自然選択説が載っていたと思われる。サクラは「ダーウィンの進化論」に感化され、群れを作つて他者と「縄張り争いだけ」をする自分達に引きつけて解釈する形で、「生きている者はぜんぶ適者」と居直つている。どのような形態や理由であれ、現在生き残つているものこそ適者と

して捉えているわけである。

モグラとサクラとの会話では「鯨の集団自殺」も取り上げられる。「鯨を怖がらせるとすれば、シヤチか鯨くらいのもだろう。ところが鯨のいない海域でも見られる現象だし、シヤチ自身が鯨の仲間、やはり集団自殺をするらしいよ。そこで学者が頭をひねつて、面白い仮説を立てたんだ。もしかしたら、溺れるのを怖がつて水から逃げているんじゃないか」とある。「もとは肺で呼吸する地上の哺乳類」の「先祖返り」ということにも言及されている。この集団自殺する鯨のイメージは、結末部で追い込まれて戸惑うヒトの姿と重なるように描き出されている。核戦争に怯え、疑心暗鬼が人類の集団自殺につながりかねないという寓意が込められている。

方舟にどのような人間を乗せるかということについて、モグラは「いざという場合、ここが未来のための遺伝子のプールになるわけだろ。それだけの責任はあるよ」と述べる。核戦争後の人類の始まりに向けて、人間の遺伝子を蓄えておくというのである。ただし、「生きのびるに値いする人間であるかどうか」の基準が示されているわけではなく、しかも「屑人間こそ理想の乗組員だという、進化的持論」もあり、観念的で具体策に乏しい。それに比べると、遺伝子プールのために女子中学生狩りをしていたほうき隊副官の方が、子孫を残す策略には長けていたと言える。

『方舟さくら丸』では核シェルターに逃げ込んだ人達によって、

ヒトの生存の意味が生物として根源から問い返されている。ユーブケツチャのような閉塞された世界への憧れも、独自の国家造りも頓挫して身動きが取れなくなってしまう。「集団をつくって社会化しようとする拡張傾向と、縄張りにこもって城を築こうとする定着傾向」を持つヒトの生態が風刺的に描き出されている。

ノアの方舟に擬した『方舟さくら丸』では、どのようなヒトを乗せたらいいかということで、生き物としてのヒトの生態が根源から問い返されている。ユーブケツチャや猿や鯨などと比べることで、生物学的にも人間の生態が相対化して捉えられている。特にモグラが便器の穴にはまり込んだのが、「縫い針に糸を通す競争」をチンパンジーと競わせると、人間が負けてしまうと驚いた時であることは、ヒトの愚かしさを集約して示している。

ところで、ユーブケツチャという極小の縄張りを持つ生物を具体的なイメージとして表出し得たことが、『方舟さくら丸』を優れた作品にした最も大きな要因である。ただし、この作品では結局、方舟の「錨をあげるスイッチ」も押されず、行方も見つからないまま頓挫してしまうところに作者の寓意は明らかだが、ストーリーとしての物足りなさもないとは言えない。それは『砂の女』の結末と同様に、『方舟さくら丸』の結末も現実の人間存在そのものを根底から問い返すことに主眼があったことに起因するだろう。つまりは、「街ぜんたいが生き生きと死んでいた」という現実に生きていかざ

るを得ないということを再認識させるためである。

三

この三節では、遺伝子にまつわる安部の言説について、随筆や対談を中心に考察したい。安部の将来を予見する能力についても併せて見ていきたい。

大江健三郎との「対談」(平2・12)の中で、「最近の分子生物学の発展には、一般的な技術論じゃなく、なにか人間の思考を根底からくつがえすものがあるような気がしています。とくに進化論の中立説^{注6}ってやつ。種の存続の意志も、実は遺伝子の自己再生と存続の意志だとなると、個体も、個人の生存の意志も、遺伝子の一つの傾向というか、一つの流れの結果にすぎないことになって……。 (中略) 遺伝子が自分自身を自覚するまで成長してきたのが、意識なんだよ」と述べている。自然選択による進化とは異なる、分子レベルでの進化が起こっていることに安部は注目しているわけである。また、生命現象を遺伝子に還元して捉えており、ヒトの意識も遺伝子自体の成長の結果として把握している。

安部は「僕らは、今までの考える方法を放棄せざるを得ず、再構築しなければならぬ。だったらスタートでしようね。とにかくDNAは生きのびたがっているんだよ。個人の願望を借りてでもね。それが偶然の一構造にすぎないとしても、とにかくそうなんだ。だ

から公害問題だってDNAは環境に一番弱いから、個体の破滅を個体に意識させることによってDNA自身が破滅から逃れようとしている」とも述べている。遺伝子を主体に据え、そこからヒトの生存を客観化して捉えている。「安部公房氏語る」(平3・6)の中でも、「何のために人間が生きているかという、自然科学が証明しているように、単に遺伝子のプログラムを温存するために生きてるんだから、何も世話焼いてやることはない。仮の宿なんだから」とある。人間の生存は遺伝子の生存のためというような考えは、安部の即物的な思考を更に展開させたものであるが、生命の主体を遺伝子に置き、人間の生存も「遺伝子のプログラムを温存するために」身を仮託しているにすぎないと捉えている。このように人間の生存を遺伝子の乗り物と捉えるのは、ドーキンスの『利己的な遺伝子』の主張に通うと言える。

「安部公房氏語る」の中では、「現代が何かを端的に言うと、自分が自分を見ることができるようになった時代だ。遺伝子が自分の顔を鏡に写して見た時代だろ、いつてみりゃ。これは不思議な時代だよね。しかし気をつけないといけないことはね、遺伝子が言葉で自覚したということ。ここにすごいトリックがあつてね。言葉が無かつたら、今話してきたことはゼロなんだ。何も無いんだよ。しかし、その言葉というものは、遺伝子がプログラムしたんだ。つまり(遺伝子が)言葉をプログラムした瞬間に遺伝子が見たわけ。

これが、一番重要な問題だ」と述べている。遺伝子というものを擬人化して捉え、「言葉をプログラムした」とまで踏み込んで捉えている。随筆「もぐら日記」の昭和六十年九月十日にも、「《言語》の誕生はまさに《遺伝子》レベルでの出来事だったのである。《家畜化》どころではなく、その瞬間は、《遺伝子》が《遺伝子》自身の発見への旅に出た驚くべき瞬間でもあった。「はじめに《ことば》ありき」という《ことば》は、人類の誕生に関するかぎり生物学的に正しい」とある。^{注7} 言葉を用いるという行為自体が遺伝子にプログラムされたものとして、その生物学的な意義を認めているわけである。

「もぐら日記」の昭和六十年九月一日には、「要約すれば《言語》は第二の本能ということになる。むしろ人間が人間になるための、遺伝子の進化は、単に言語の獲得だけではなかったはずである。数多くの突然変異の積み重ねがあつたにちがいない。しかしかに多くの新情報が蓄積されようと、言語の獲得と比べるわけにはいかなのだ。(中略) 認識は言語機能そのものだから、言語についての認識は『認識の認識』だろう。言語の科学は、内省という従来はあまり科学的とはみなされなかった心理的手続きによらなければならぬわけである。もういちどチョムスキーの『ことばと認識』を読みかえしてみよう」とある。チョムスキーの『ことばと認識——文法からみた人間知性——』(昭59、大修館書店)では、「言語能力を

人体の身体器官と事実上同じようなもの」とみなし、「言語の仕組み、機能、個体および種における発達」を生物学的な視点から考察している。「言語の研究は人間の生物学の一部を成すもの」であり、言語の習得の過程については、「遺伝的に決定された特定の状態」として捉えている。つまり、「複雑な知的構造を発達させる」上で、「遺伝のプログラムがその達成に主たる役割を演じていると想定するのが妥当であろう」という考えである。ヒトの言語獲得の過程を「第二の本能」と捉える安部の考えは、チョムスキーの言語についての生物学的な考察を踏まえて展開していることが分かる。「もぐら日記」の昭和六十年九月十五日にも、「もともと《言語》の形成は個人レベルでは成り立たないものなのだ。遺伝子レベルで用意された《言語の場》を基礎に、その集合体が個別言語の習得を可能にする。つまりこういうことだ。群を形成していさえすれば、おのずか《言語》が習得されるような能力が、遺伝子のなかに組込まれている。その個別言語はそれぞれの群に固有なもので、群れの内部で共有できればいい。ただしその本質から言って、《生成文法》で基礎づけられているという性質は普遍則である」とある。ここでもチョムスキーの「生成文法」、つまり人間の言語の学習は、人間に備わった遺伝的プログラムの具体化であるという考えを肯定している。なお、日高敏隆は「人間は遺伝か環境か？ 遺伝的プログラム論」（平18、文藝春秋）の中で、「チョムスキーの生成文法理論」について、

「その根本的な立場は、きわめて妥当なもののように思われる」と述べている。

「もぐら日記」の昭和六十年九月七日には、「ぼくたちの祖先が部族戦争に勝ちぬいてきた者たちであったことも事実である。戦争とは何なのか。人間とは何なのか。なぜ種間の殺しあいが種の維持に有効だったのか。戦争が淘汰圧と矛盾しなかったのなら、戦争が人間になんらかの利益をもたらしたことも認めざるをえなくなる。人間の進化の果ては地球の破壊者になることだったのだろうか。それが誕生以来DNAに刻み込まれたプログラムだったのだろうか」とある。DNAには、地球の破壊者としてのヒトというプログラムが組み込まれているのではないかという独自の想像力を働かせている。同月十二日には、「ぼくが思想の梃子の支点としての《言語》を考えるようになったのは、たしか今年のはじめNHKでの渡辺格氏との対談の際、参考までに目を通した『分子から精神へ』という本のせいが大きかったように思う。（中略）ぼくが分子生物学に興味をもったきっかけは（中略）従来二元論的に考えられがちだった生命と物質を、還元主義的方法で統一してみせてくれた点にあった。分子生物学が基本的にはほぼ完成の域に達し、今後の方向を摸索中だと聞いていたのは、当然その成果を精神現象の還元主義的説明に向けるものと期待していたわけだ。ところが『分子から精神へ』という本のなかでは、まったく違った立場が展開されている。遺伝

の法則を分子レベルで説明する手がかりをつかんだ成果に、いちどは酔ってはみたものの、やがて全動物をつらぬくDNAの法則に一貫性がないことが分り、そうなるにせよ分析してきた道を逆にたどって総合にむかう希望も完全に絶たれてしまった、これこそ還元主義の行き詰まりである、という悲観論」とある。ここで「分子生物学が基本的にはほぼ完成の域に達し」というのは、遺伝暗号の解読が完成したことを示しているが、個々の生命現象にそれが適用できないために「悲観論」に陥ったというのである。因みに、中村桂子の『自己創出する生命——普遍と個の物語』（平5、哲学書房）に拠ると、DNAを遺伝子のセットであるゲノムとして見るようになったのは八〇年代の半ばのことであり、この頃から、還元、分析を基本にして機械論的に生き物を見るのではなく、ゲノムを通して、歴史性や全体性にも目を向けるようになったのである。「還元主義の行き詰まりである、という悲観論」は八〇年代の半ばになって、ゲノムというような捉え方をすることで克服されたとも言える。

ところで、安部が挙げた柴谷篤弘・藤岡喜愛『分子から精神へ——紋様形成と酔能』（昭55、朝日出版社）は分子生物学者と人類学者による対談形式で、表題に示されたような内容について分かり易く述べている。『分子から精神へ』は、この当時としても分子生物学についての専門書というよりも入門書のような本である。未解明のところもはつきり分からないと述べており、むしろ謎の部分と

して安部の想像力を刺激したとも言える。安部は分子から精神への移行のきっかけになったものとして、言語が重要な役割を果たしたということに着目している。

なお、中村桂子の『生命科学』（平8、講談社）に拠ると、七〇年代の分子生物学は、第一に、「生命の歴史性、生命はどのようにして生まれ、進化してきたのか」ということ。第二に、「人間のよくな多細胞生物が一個の受精卵から発生し、分化していく時、その途中でいったい何が起きているのか、これを調節している機構は何か」ということ。第三に、「神経系の作用、特に人間を頂点とする脳の働きのからくりは、いったいどうなっているのか」ということである。安部は文学者らしく特に第三の「脳の働きのからくり」、つまり言語に強い関心を示している。「ことばがいつ誕生したかを問うことは、言語中枢と命名された脳の部位が、いつ人間の祖先にでき上がったのかを問うことと、たいへん近くなってくる」わけである。また、第二の進化の過程についての関心も、『第四間水期』などに反映している。

安部は渡辺格との対談「物質・生命・精神　そしてX」（昭60・5）の中で、「分子生物学そのものが、ある意味で人間の思考なしは認識そのものに訴えかける。哲学的という問題が起きるかもしれないけれども、ある意味での革新的だったポイント、これは僕はもっと高く評価されていると思います。つまり、生命も物質も同じ

場で、同じ方法で論じられ得るといふこと、この発見といふのは一種の革命だつたと思います」と述べており、「天動説、地動説のギャップと同じぐらい、分子生物学の前と後では、やはり現実を見る目が変わって行くところがある」と高く評価している。^{注9}分子生物学によって、生命と物質を同次元で捉えられるようになり、認識の変化があつたことに画期的な意義を見出している。

四

安部には人間を即物的に、動物的に捉える傾向があつた。例えば、『燃えつきた地図』（昭42・9）には、「上から見下ろしていると、人間が歩く動物だということがよく分る。歩くというより、引力と闘いながら、内臓を入れた重い肉の袋を、せつせと運搬している感じだ」とある。

もともと安部は、縄張りや種や進化など生物学的なことに強い関心があつたし、ヒトの存在意義をそのような視点から考察し、それらは自ずと作品にも反映している。生物学について、安部は動物としてのヒトとはどんな生き物かという側面から強い関心を示している。身体への関心のみならず、肉眼では捉えきれない身体に組み込まれた遺伝子のプログラムにも興味を示している。そのことによつて〈知〉の領域における創造的可能性を示したものとなり得ている。特に、分子生物学という新たな分野については、その画期的な意

義にも逸早く着目している。積極的に関心を示すだけでなく、遺伝子の構造説明が、ヒトが生命を認識する際の変革につながるものとして高く評価している。当時の最新の科学の知見に拠りながら、安部は自らの文学者としてのアイデンティティを確実なものにしようとした。生命体としての人間を合理的、科学的に解明しようとする安部の志向に、分子生物学という学問の成果はまさに合致していたと言える。

ヒトの言語習得について安部は強い関心を示しており、チョムスキーなどの影響もあつて、先天的に遺伝子にプログラムされているという立場からの言説が目につく。^{注10}因みに、正高信男『ヒトはいかにしてヒトになったか——ことば・自我・知性の誕生』に拠ると、安部が関心を持っていた言語習得に関わる遺伝子の発見も、現在では為されている。

『第四間氷期』や『方舟さくら丸』など安部の作品では、生物学的な知見が、ヒトの存在を認識する上で効果的に働き、それがひいては作家としての安部が独自の想像力を働かせる上で有効であつたことが分かる。それだけでなく、生物学的な言説が作品のリアリティを保証する装置としても機能し、説得力を持たせている。要するに、生物学の新たな知見によつて、人間についての認識がどのように変わるのかという関心を持っていただけでなく、それらを踏まえて小説におけるフィクションとしてどれほど有効な方法がありうるのか

と模索することが、作家としての安部の姿であったと言える。知性と身体、文学と科学、個人と国家などの一見背反するとも思われる命題を視座に収めながら、独自の想像力を駆使したところに安部の存在意義がある。

註

注1 「文学理論の確立のために」(昭27・6)の中でも、「文学と科学とが質のちがうものであることは当然だが、しかし、日本の文学者にあまりにも自然発生的な発想に重点をおき、科学精神を失った(というよりはじめから持たない)ものが多いのは悲しむべきことだ」と述べている。

注2 磯田光一は新潮文庫の「解説」(昭45)の中で、「第四間水期」の「水棲人間の創出は、おそらくレイセンコの遺伝学に近い思考に依拠するものと思われる。ソヴィエト生物学の基盤を形づくったレイセンコは、周知のように「遺伝」が「環境」によって変えられることを実証した」と述べている。獲得形質の遺伝説を唱えたレイセンコの「第四間水期」への投影については、鳥羽耕史「安部公房『第四間水期』——水の中の革命——」(『国文学研究』平9・10)の中で具体的に言及されている。

注3 安部は「第四間水期」に関して、後に「技術と人間」(『毎日新聞』昭60・10・28)の中で、「近未来の人間は、遺伝子組替えの技術を使ってエラをはやし、水棲人間に変わってしまった」と述べている。ここには作品の内容からみて、自己の先見性を主張する意図が窺える。

注4 「第四間水期」の中でゴチック体で書かれている「知るとい言葉の正しい意味は、秩序や法則を見ることができななしに、むしろ混沌を見ることができたのだろうか」(傍点引用者)を踏まえている。次の「混沌」も同じ。

注5 新戸雅章は「第四間水期」と未来の終わり」(『ユリイカ』平6・8)の中で、「第四間水期」が書かれた時代背景と関連させながら、「未来を予測し、計画したいというのは、実はそれを現在の支配下に置きたいという欲望にはかならない」と述べている。

注6 池田清彦「さよならダーウィニズム——構造主義進化論講義」(平9、講談社)に拠ると、「木村資生が、一九六八年に唱えた中立説という学説がある。自然選択において有利でも不利でもない中立の突然変異が、偶然集団内に拡がって固定することにより、進化が起るとする説である。集団のDNA上に起る塩基の置換は、長い目で見ると、ほとんど偶発的に起きていて、そこには自然選択的な、つまり適応的なバイアスがかからないとするものである」と記されている。

注7 分子生物学者渡辺格との対談「物質・生命・精神 そしてX」(昭60・5)の中でも、安部は「分子生物学的認識というものも実は認識なんです。言語がもしなかったら到達できなかったはずの思考である。そうすると、遺伝子というものは、遺伝子の中に、やがて自分自身を発見する手段をインプットしてあったとも考えられるわけです。結果的にそうなったわけです」と述べている。

注8 正高信男「ヒトはいかにしてヒトになったか——ことば・自我・知性の誕生」(平18、岩波書店)

注9 ドナルド・ブラウンとの対談「科学と芸術 結合は可能」の中でも、安部は「分子生物学がわれわれに与えた重要な問題提起は、遺伝子組み替えの脅威よりも、もっと深刻な思想の転換を求めているということではないか。生命というものを物質レベル、分子のレベルでとらえるということは、生命と物質とは全く別のものだとする二元論的な観念論を打ち破り、生命の行方について従来のモラルを消し去るという思想的な「夜明け」に立っているといえるだろう」とか、「分子生物学に驚くのは、人間のナゾに挑む新しい手段になるという点だ。つまり、かつてのアインシュタインがいったような科学のカギのはいらない精神の領域の問題を解く「カギ穴」を、人類はようやくやくさぐりあてたものではないかとい

うことだ」と述べている。

注10 安部は「ユネスコ円卓会議用メモ」(昭61・9)の中でも、「さまざまな言語観がある。やつと最近、言語を自然科学的検証の対象として考える傾向が強まってきた。遺伝子にバイオ・プログラムされた、大脳の生化学的反応だという認識」と記している。

〔追記〕 本文の引用は、『安部公房全集』(平9〜12、新潮社)に拠った。